

ブラジルでは日本の2.2倍の面積に2億人強の人が暮らしている。リオデジャネイロは人口600万人でサンパウロに次ぐ第2番目の都市である。貧富の差が激しく「ファベラ」と呼ばれるスラム街が国内に1000カ所以上存在する。一方でリオのカーニバルやコパカバーナやイパネマのビーチは世界中から観光客が訪れ賑わっており、95,000人を収容可能な世界最大のサッカー場マラカナンスタジアムもこの地にある。山とビーチと奇岩がおりなす光景は2012年に世界遺産に指定されている。

「ファベラ」と呼ばれるスラム街では強盗・麻薬・闇組織の縄張り争いが頻発し、旅行者は決して近づかないように言われた。「CITY OF GOD」というストレートチルドレンが主人公のブラジル映画を10年以上前に見たときに衝撃を受けたが、あの映画は実際にファベラで撮影されたという。

カヌースラローム会場はリオオリンピックのコースでファベラの近くにあり、オリンピック後、警備を置いていない期間に、椅子や机や金属ケーブルが盗難にあったそうだ。4機あるポンプのうち1機が故障しており、水量はオリンピックの時の3/4と少なくなった。近くのバスケット会場の体育館も床が抜け窓ガラスが割られ、使える状態ではない。スポーツよりも、その日食べていくことに必死な層が多いからと地元の方に説明を受けた。

オリンピックで整備した施設がレガシーとして残り、地元の人に有効活用されてこそ、オリンピックの意義がある。しかしカヌースラローム会場は、アテネも北京も現在は使用されていない。一方ミュンヘン、ロンドン、シドニーのコースでは今でもワールドカップが開催され、活用されている。コースが活用されている国は競技のレベルが高く維持されていることも共通している。

大会役員の宿舎は、リオ五輪VIP用に建設されたかなりグレードの高いホテルがあてがわれた。ホテルの前50mほどのところに、ゴミだらけの汚れた池があり、そこに野生のワニや世界最大のげっ歯類カピバラを発見した。ワニは体長2m近くあり、カピバラは子豚ほどの大きさの成獣から、猫くらいの大きさの幼獣まで、親子で10頭以上が群れていた。市街地のホテル前にこれほどの野生動物がいることに驚いた。

審判については、今年度からゲート審判用のペーパーがなくなり、スマホで失点を入力する方法に変更された。私は6ゲートから13ゲートまで8本のゲートジャッジを担当した。日本でも8本のジャッジを一人で担当した経験はない。ゲート審判は全部で12名おり、各自が4本から8本を担当した。1本のゲートにつき異なる角度から3~4名で判定し、うち1名がプライマリージャッジと呼ばれ、判定が割れた場合、他の審判より見立てが優先する。私は8番と10番のプライマリージャッジを命じられた。長く見ていると、ゲートを通る直前のラインどりで、接触するかどうかを高い確率で予測できるようになった。

スマホには0・2・50のボタンがあり、いずれかを押す。見ていなかった場合や他の審判と判定が異なる場合に？を押すと直ちに、ビデオジャッジが判定を始める。ビデオ判定の結果は現場には戻ってこないが、すぐに集計システムに反映され、ゴールとほぼ同時

にタイム・失点・順位が確定する。視聴者や観客にわかりやすい競技にするためには、判定の迅速さは何より大切である。ビデオは万能ではないと思うが、従来の方法に比べずいぶん集計速度が速くなった。

9月26日（水）Sue 審判部長と Prono 大会委員長の指示で、レース終了後に2時間ほど時間をかけて ITO のブレンストーミングが開催された。ブレンストーミングとはアイデアをつくる会議のやり方の1つ。全体を数名の小グループに分けて、あるテーマに対し参加者がアイデアを出し合い、あとで各グループのアイデアを整理しまとめあげるといったもの。次の4つのルールがある。1) 他人のアイデアを批判しない。2) 自由奔放なアイデアを歓迎する。3) 質より量、アイデアは多いほどよい。4) 他人のアイデアを活用し、発展させる。

約25人程度の ITO を5つのグループに分けて討議がなされた。私の班はカナダから来た Duncan 氏、ドイツの Frank 氏、ブラジルの Camila さん、ラトビアの Elena さんの計5名。テーマは次の2つ

- ①世界規模の大会はヨーロッパに集中しているが、すべての大陸で同様の大会を開催するにはどうしたらよいか？
- ②現状のスラロームのルールで変更すべき点はないか？

① 各大陸での大規模大会の開催について

私がアジアからただ1名の参加であったので、アジアの立場を代弁すべきと考え、個人の考えではあるが以下の点を話した。

アジアは経済発展がめざましいとは言えまだまだ貧しい国が多く、参加への大きなハードルはお金とカヌーの輸送である。東京のスラロームコースが来年完成し、ほかにもタイ、台湾にコース建設の計画がある。中国には既に数カ所にコースがあり、アジアでのワールドカップ開催も可能になってくると思われる。2戦開催できれば、わざわざ遠くから来て1戦で終わるより良いと思う。アジアの国は一度入国すれば衣食住などの生活費が欧米に比べて割安なので、ワールドカップ開催が難しいとしても合宿等に活用して、ヨーロッパの選手と記録会などを定期的に行えばアジアのレベルもだんだんと向上するに違いない。

もう1点のカヌーの輸送に関しては、2分割、3分割可能なスラローム艇の開発を行ってほしい。そのために重量規定を重くしなければならないとしても個人的には仕方ないと思う。

② スラロームのルール変更について

現行18~25本のゲート数を16~20本程度に減らして、コースを短くしてはどうかと提案した。国内のローカル大会では15本程度のレースが結構多いし、国体も15ゲートで行っている。

各国からもさまざまな意見が出されたので、以下紹介する。

①各大陸での大規模大会の開催について

- ・ワールドカップなどの時に初心者と上級者の合同トレーニングを行って、レベル向上に努めてはどうか？
- ・飛行機輸送中のカヌーの破損が問題になっている。3分割カヌーの開発に賛成。
- ・ドイツ人とタイ人を両親に持つタイの選手が、タイでのスラロームの普及に大きく尽力している。そのような核となる人物を各国に配置すると普及が進むのでは？
- ・メンタルトレーニングやカヌー講習会の必要性（よく聞き取れず）

②スラロームのルール変更について

- ・スラロームクロスをいつまで続けるのか？カヌーを購入したり、発艇台を作ったり、開催国の負担が大きい。
- ・C2の幅と長さをもう少し短縮できないか？K1を3mにしたら短かすぎるか？（飛行機の輸送の問題）
- ・ICFランキング作成のサポートが必要。（仕事が多い様子）

早口でしゃべられると聞き取れないことも多く、ヒヤリング能力を磨かなければと思った。ブレイクストーミングに参加してみて、欧米人の自己主張の強さを再認識した。あらかじめ国で話し合っているはずもなく、あくまでも個人の意見だが、どんどん発言する。普段は仲良くしていても、意見が異なると会議では真っ向から反発する。今回日本人は私1人だが、このような会議に参加したからこそ取れる情報もあり、逆に参加していないと世界の流れがわからない。気の強い欧米人の中でも意見を主張できる者が会議に参加し、日本やアジアの立場で主張をしていくことが大切と改めて感じた。これはスポーツでも政治の世界でも基本的に同じことなのだと思う。



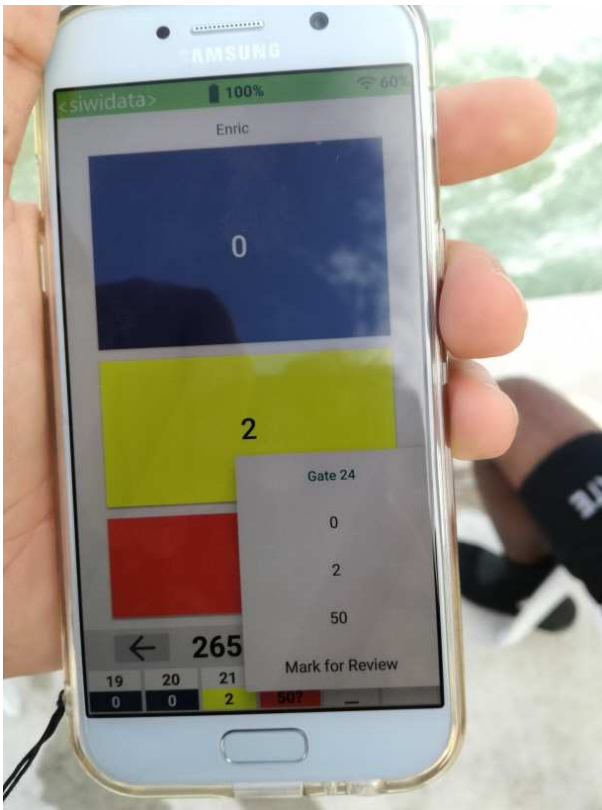
世界遺産に指定されたりオの景観



ホテル前のゴミだらけの池に潜むワニ



今回のコース



ペナルティ入力用スマホ

「Mark for Review」を押すとビデオジャッジが始まる。



戦い終えた日本選手団帰国の日



コパカバーナビーチの SUP レンタル